

門祖日隆聖人物語

第23回



550

南シナ海に浮かぶ種子島は、鉄砲伝来の地として有名だけど、実は門祖聖人の時代に、領主始め住民の多くが律宗の信心から、御題目を唱えるご信心に替えたことでも有名なんだよ。でもそれには悲しい大変な出来事があったんだ。今日はそのお話をしましょう。



種子島日興ヶ浜に建つ石子詰め碑

帰ったのだと決意を述べるんだ。そして、日典師はそれから島のあちらこちらで、御題目のありがたいことを伝え歩くんだよ。

寛正四年四月、やがて、その声が耳に届いて、数人がご信者になるんだ。その中に徳永右衛門という人がいて、その人の手引きで再び領主に会い、今度は領主の時氏も御題目のご信心がありがたいことに気づき信者になると言ったんだよ。ところが、それを聞きつけた律宗を信じていた人々に襲われ、領主を騙す悪人だとして、浜辺で生き埋めにされるんだ。

その浜辺では、一カ月近くも地の底から御題目が聞こえてきたんだぞうだよ。だから、その浜辺を今では日典ヶ浜と呼ぶんだ。

意志を継いで

勸学院で日典師とともに教えを受けた日良師は、日典師から、種子島で一緒にご奉公をしようと約束していたんだよ。ところが種子島に着くと日典師は亡くなっていったんだね。そこで、日典師の意志を継いで、ご信者だった徳永右衛門とともに領主を説得し、領主自らが「御題目の信心をする」と改宗を宣言するんだ。

やがて、島に住む全ての人が御題目のご信者となり、尼崎からは日良師の大先輩である金剛院日増師もご奉公に来て、屋久島、口永良部島の二島も住民全部がご信者になったんだ。

そして明応四年（一四九五）、領主の時氏により西之表（種子島の城下町）に本源寺が建てられたんだ。

次回はいよいよ最終回だよ。

種子島のじゅ弘通

種子島にある律宗の慈恩寺でお坊さんになった林応は、大変賢く、領主の種子島時氏は、南都（奈良）にある律宗の本山で修行できるよう留学させるんだ。

七年が経ち、一人前の僧侶となった林応は、種子島に里帰りするため堺の港に行くんだ。

定源院日典

その堺で、熱心な太都というご信者から御題目のご信心がありがたいことを聞き、建てられて間もない顕本寺に行って住職の日浄師から教えを受け、続いて尼崎本興寺におられた門祖聖人のもとで改宗し、僧名を「日典」といだけるんだ。

数年後、日典師は尼崎勸学院（学校）の教授になり、やがて門祖聖人の代わりに講義をされるまでになったんだよ。

寛正三年（一四六二）、日典師六十二歳の時、師の門祖聖人の許しをいただいて帰郷し、種子島に御題目のご信心を弘められることになるんだ。



日典師の遺志を継いで種子島へ

者・日蓮大士の教えをいただく門祖聖人の弟子・日典であると名乗り、御題目のご信心がありがたいこと、律宗の信心は誤りであることを伝えたんだ。

領主の時氏は怒り、島を立ち去れと命じたんだけど、日典師は教えを弘めるために